Introducing 16 regional activity groups in Tainai.

SMILE

地域を笑顔にする
ボランティア、NPO

-胎内市の地域活動団体-

障がい福祉から空き家対策まで。
多様な活動を行う 16 団体にインタビュー

この冊子に込めた想い

何気なく日々を過ごしていると、ついつい見落としがちになってしまいますが、私たちの暮らしは、誰かのぬくもりやあたたかさに支えられていることがとても多いです。

ボランティア団体や NPO もそんな誰かのひとり。
胎内市では、数多くのボランティア団体や NPO が、誰かの困りごとに寄り添ったり、活力ある地域づくりのために活動しています。

この本「SMILE」は、胎内市のボランティア団体・NPO の中から、16 の団体の活動を紹介しています。

この本が私たちの暮らしを支える人々の力強さ、温かさに触れる機会となれば幸いです。ぜひ、興味のある団体からお読みください。

For our smile
～このまちに笑顔と安心を。～

SMILE

目次
-Index-

胎内市の地域活動団体 16

自然環境保護、障がい福祉からまちづくりまで。
地域を笑顔にするボランティア・NPO16 団体。

01. 荒井浜海岸をきれいにする会
02. 胎内市音声訳「ひわの会」
03. 板額会
04. おもちゃ病院たいない
05. 中条点訳グループ「ほたる」
06. 樽ケ橋遊園ゆるゆる隊
07. 手話サークルかえで・はまなす
08. 笑いヨガクラブ
09. 自然を楽しもう会
10. 特定非営利活動法人ふるさと奥山の荘
11. NPO 法人スポーツクラブたいない
12. 特定非営利活動法人荒川マリンクラブ
13. 特定非営利活動法人ヨリシロ
14. 特定非営利活動法人ミンナのチカラ
15. 特定非営利活動法人松原ステーブルス
16. フードバンクたいない「キボウノヒカリ」

1

地元の浜を地元の手できれいにしよう

荒井浜海岸をきれいにする会

4月にもかかわらず太陽がくっきりと日本海を照らし、遠くには粟島を望む海岸で、子どもからシニア世代までの幅広い年代の人が集っていた。場所は胎内市荒井浜海岸。国道113号沿いに位置し、夕日・夕焼けの名所であるはまなすの丘からもほど近い海岸である。この日は今年初めての荒井浜海岸をきれいにする会の海岸清掃活動が行われていた。

活動時間になると「無理せず、楽しくやりましょう」の号令の下、参加者はビニール袋片手に砂浜に漂着しているゴミの清掃を時には真剣に、時には和気あいあいと行う姿があった。

月１回の清掃活動の様子

荒井浜海岸をきれいにする会は、地元の浜を地元の手できれいにしようと、令和３年３月から活動をはじめた荒井浜集落の住民有志の会である。４月から10月までの間、月に１度海岸清掃を行っている。令和３年は６回実施し、延べ１６３人参加した。

ゴミだけでなく、葦などの漂着物も清掃

スローガンは「無理せず、楽しく！」

設立して1年がたつ本会は、代表の長野彰夫さんが海岸に漂着した流木やプラスチックなどのゴミが手つかずのままになっている状況をなんとかしたいと地元集落に呼びかけ始まったのがきっかけである。長野さんは釣りが趣味で、海岸へよく釣りに行くと言う。流木・プラスチックの他、ペットボトルや漁具などが漂着している海岸は景観も損なわれる。自分たちの手で少しでも海岸がきれいになればとの思いのもと、賛同した約３０名の会員と活動をしている。

それにしても次から次へと漂着したゴミの多さに驚く。これからも長く活動を続けていくためには、活動に対するモチベーションの維持が不可欠だ。そのため会のスローガンを「無理をせず、楽しくやろう海岸清掃」として、自分のペースで参加することを大切にしている。

また、この活動で環境汚染防止だけでなく、シニア世代のつながりづくりと生きがいにも繋がっている。月に一度顔を合わせ、おしゃべりしながらの活動が楽しみになっている参加者もいるという。

荒井浜から世界へ

最後に今後のことについて伺うと「『継続こそチカラ』を大切に活動を続けていきたい」とのこと。海岸清掃をしてもまた、新しい漂着物が海岸にあがる。放っておけば、波がまた漂着物を海にさらい別の海岸へ流れ着くかもしれない。地元の浜を自分たちの手で少しでも良くすることは、ゆくゆくは世界規模で問題となっているマイクロプラスチック汚染問題の解決にもつながる活動である。

胎内市の荒井浜から遠く世界の海岸に思いをはせ、コミュニティー（地域社会）の重要性や身近な問題に真摯に取り組むことの大切さに気づかされる体験となった。

荒井浜海岸をきれいにする会の皆さん

【荒井浜海岸をきれいにする会】
地元荒井浜の海岸の清掃活動などを行う地域住民による団体。
活動日：４月から 10 月　月１回程度

取材・文／新潟県労働金庫中条支店：忠

2

胎内市音声訳「ひわの会」

声を通じて伝わる暖かい心

訪問の約束をした日、会場に近づくにつれ、遠くからでもよく届く声が聞こえてきた。ここは胎内市音声訳「ひわの会」の活動場所だ。

ひわの会は昭和54年4月に結成された歴史あるボランティア団体で、目の不自由な方のために、市報や議会だより、社協だよりなどを音訳してCDに録音して利用者にお届けする活動を行っている。また、胎内やすらぎの家から委託を受けて広報誌も音訳している。

活字を正確に音声に置き換える

音声訳（音訳）という言葉を初めて聞く人もいるだろう。実際筆者も今回初めて音声訳に触れた。音声訳は、目の不自由な方のために、墨字（活字）で書かれている書籍や雑誌、広報誌、新聞などの内容を音声にして伝えることである。現在、ひわの会のメンバーは13名在籍し分担して音声訳に取り組んでいる。音声訳の難しさは朗読と違い読む人の解釈や気持ちを込めて読むのではなく、読む人の解釈をなるべく入れないで、正確に文字を音声に置き換えることだ。目が不自由な方の目の代わりになって情報を声で伝えることが何よりも大切なことである。

下調べにこそ時間をかける

ひわの会では、2008年頃まで音声訳をカセットテープに録音していたが、現在はパソコンソフトに録音している。以前と比べて録り直しが格段に楽になったが、録音する時の緊張感は変わることがない。

ひわの会では録音前の下調べを大切にしており、収録日ごとにあらかじめ3名程度の担当者を決めることにしている。また、月に一度、メンバーが講師となって勉強会を開催しスキルアップをはかっている。

録音作業を間近で見学したが、文章を細かく区切って何度も読み上げ、編集作業を何度も繰り返すという大変根気のいる作業であった。

市報の録音作業はおおよそ3～4時間かかる。担当者は事前に資料にルビをふって本番に臨むが、特に漢字の読み方や、略称、人名の下調べは大変苦労しているようであった。

地域ボランティアだからこそ出来ること

以前は、ご利用いただいている方や他の団体と交流したり、情報交換をする場があったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、現在はそのような機会がなくなってしまった。

今回話を伺った代表の忠さんからは、「ご利用いただいている方から対面で本を読んで欲しいなど様々な要望をいただいているので出来る限り応えていきたい」、「音訳CDが音楽CDのように手軽に利用できる時代が来て欲しい」など多くの展望を聞くことができた。

技術の進展により、オーディオブック（ナレーターや声優が本を朗読した「聴く本」）やテキストを音声に変換するソフトも存在するが、利用者に寄り添いながら培ってきた歴史は何事にも代えられない。ひわの会の皆様の正確で冷静な声の裏にある温かい心に触れた貴重な体験となった。

【胎内市音声訳「ひわの会」】
視覚障がい者向けに市報、議会だより等を音声訳する活動を行っている。

取材・文／水沢化学労働組合：坂上
新潟県労働金庫中条支店：神田

3

板額御前をPR！
板額会

緋色の鎧を身につけ、大弓を持ち白馬にまたがる女性。平安末期から鎌倉初期に活躍した女武将、板額御前。平安期に越後を治めた大豪族の姫であった彼女は弓の名手であり、鎌倉幕府軍との戦いで大いに奮闘したと伝えられる。

彼女の活躍は歴史書「吾妻鏡」に紹介されており、歴史上で活躍した女性はそのほとんどが物語や伝承で、実在すら証明されていないことがある中、板額御前のように実際に戦場で戦ったという記録がある女性は日本公式の歴史上他に例を見ない。

彼女の活躍した史跡を胎内市民共有の文化的財産とし、それら財産が活用され愛され続けていくことを願う団体こそ、板額会である。

浮世絵師 月岡芳年が描いた板額御前

越後が誇る、才色兼備の女武将

板額会の活動拠点は市内の公民館等であり、決まった場所はない。小学生から大人まで幅広い年齢層の会員で構成されるが、板額御前を愛し、広く後世に伝え、その活動を通して胎内市を活性化させたいという思いは変わらない。

活動内容は多岐にわたる。学校での総合学習や社会科授業での歴史伝承、マンガ仕立てのパンフレット作成やキャラクターグッズの制作、また年に一度開催される「板額の宴」では板額御前の生涯を演劇に仕立て、登場人物に扮した会員が公演から企画運営までを行っている。一人でも多くの人に板額御前を知ってもらうため、日々試行錯誤しているという。

公民館でのグッズ制作の様子

イタヒタイ。そして―大河―

筆者は以前、市外から観光に訪れた男性に、「イタヒタイ御前とは誰ですか？」と聞かれたことがある。ハンガクと読むことを知らずイタヒタイと勘違いしていたのだ。板額御前に関するパンフレットを読んでいたため、私は彼女の歴史について簡単に説明することができた。これはまさしく板額会の周知啓発活動の賜物である。

しかしながら、イタヒタイ。まだまだその知名度は低い。才色兼備の女武将の大河ドラマ化までの道のりは長く険しそうであるが、百発百中の腕前を持つ板額御前のように、板額会の放つ矢はこれからも多くの人の心を射抜いていくだろう。

【板額会】
鎌倉時代の胎内市の女武将「板額御前」の活躍の伝承を通じ地域活性化を図る活動を行う。

取材・文／胎内市職員労働組合連合会：金子

4

大切なおもちゃを通して心を育む おもちゃ病院たいない

ほっとHOT・中条のドアを開けるとテーブルを囲みおもちゃを見つめる人たちの姿があった。彼らはおもちゃ病院たいないのおもちゃドクターだ。さきほど壊れたおもちゃの治療（病院なので修理ではなく、治療といいます）を終え、再び元気に動くおもちゃを見て喜びあっていたところだった。

おもちゃ病院たいないは、おもちゃの治療を行うボランティアグループで、毎月第3土曜日にほっとHOT・中条で開院している。現在14人のおもちゃドクターが在籍しており、毎月10件程度のおもちゃの治療を行っている。治療するおもちゃはぬいぐるみ、木工品、電子機器と様々なものがあり、それぞれ得意な分野をもつドクターが協力して治療している。

おもちゃ病院は活動やおもちゃの治療を通じて、こどもたちに「物を大切にする心」を育み、おもちゃドクターは知識や技術を活かして「おもちゃが治ったときの喜び」を一緒に感じあえる場所である。

思いから技術は生まれる

「もともと電子工作が好きで高校生のころから趣味でアンプを組み立てたり、アマチュア無線をしていた」と語ったのは院長の橋本さん。社会福祉協議会からおもちゃドクターのことを聞き、面白そうと思い講習会を受けておもちゃドクターになった。その後、社会福祉協議会から胎内市におもちゃ病院を開院したいという話を受けて、副院長の石山さんらと共に平成23年4月におもちゃ病院を開院した。

最初は治療するので精一杯だったが、慣れてくるとおもちゃを治すことの楽しさを感じることができるようになり、今はおもちゃが治ったときの喜びを分かち合えたり、こどもの喜ぶ顔がみられることが楽しみであり魅力だとのこと。

思いを語り合えるサロンに

現在おもちゃドクターの平均年齢は70歳前半。今後も安定して活動を継続していくために、若いドクターを増やし、幅広い年代の人たちが集まれるようにしていきたいと橋本さんは語った。ドクターになるには資格は必要なく、なりたい思いがあれば講習会等で技術を学んで誰でもなることができる。

また、壊れたおもちゃを自分で治したい人のために治し方を教えて一緒に治すこともできる。実際に、私が以前おもちゃ病院を利用した際には、自分で治療を行い、隣で見ていたドクターが「うちでドクターやらないか？」と笑いながら勧誘してくれたこともあった。

今後の活動について話を聞くと、「電気や機械など理系の趣味や技術について話し合う場所は少ない。おもちゃ病院がそのような趣味を持った人たちが集まって話をするサロンのような場所になって、地域の人たちの繋がりを広げていけたら嬉しい。」と橋本さんは思いを語った。

【おもちゃ病院たいない】
おもちゃの修理を通じて子ども達に「物を大切にする心」を育むとともに、おもちゃが治った喜びを分かち合う場所。

活動日：毎月第３土曜日

取材・文／日立産機システム労働組合：清水、池田

5

人と人をつなぐあかりに。中条点訳グループ「ほたる」

「ほたる」と聞くと初夏の風物詩であり闇夜に飛び交う幻想的な無数の光が舞う風景を想像する。中条点訳グループ「ほたる」は現在8名の会員が在籍しており、毎月、市報、社協だよりの点訳や、年3回やすらぎの家の広報誌を点訳、点字印刷し必要としている方に郵送している。昭和60年に「視覚に障がいのある方にあかりを届けたい」という思いを持った人たちが集まり「ほたる」が設立された。

点訳とは、目の不自由な方のために墨字（活字）で書かれている書籍や広報誌、新聞などの内容を点字にして伝えることである。また、同じく音声にして伝える音声訳（音訳）もある。視覚障がい者にとって「触れる文字」である点字は生活をする中で情報を得るための大切なツールである。

点訳した市報たいない

触れて感じる点字の世界

点字には読みやすくするために文章を切る「分かち書き」などの一定のルールがある。また、文章内容を理解してもらうため、言葉を補足して点訳している。スマートフォンやパソコンを使って手軽に多くの情報を入手できる今日、公共施設や様々な商品などで私たちが点字を目にする機会が多くなったものの、生活に根ざした点字はまだまだ不足している。私たちが目で読み得る情報を点字に直し、視覚障がい者に対して同じ情報を提供するためになくてはならない活動である。

点訳は手作業のほか、プリンターも用いられる

点訳で広がる新しい世界

「ほたる」では、このほかにも、「視覚障害者情報センター（点字図書館）」からの依頼にもとづき点訳図書の作成を行っている。完成した点訳図書はデータとして保管され全国の視覚障がい者のために提供されている。会員の皆さんに作業における苦労を伺うと、旧仮名遣いで書かれた新聞の文章の点訳や、大学テキスト等、専門的なものの点訳はインターネットや辞書を使用して大変根気のいる作業であったと答えが返ってきた。そして、地名や名前の点訳には常に辞書を活用し特に注意が必要であることも教えてくれた。

誰でも安心して暮らせる世界へ

会員が活動を始めた経緯は、視覚障がい、弱視の人へのボランティアに関心があったこと、学生時代柔道をしていて盲学校の学生がハンディ差を感じさせずにいたことに感動を覚えたこと、退職した際に何か力になりたいと思ったことなど、思いも様々である。一方で目の不自由な方に対して点字を通じてより多くの情報を届けたい気持ちと、利用者の方から届いた「読みましたよ」という声にやりがいを感じ今日まで根気強く点訳活動を行っている。

中条点訳グループ「ほたる」は、人と人をつなぐあかりとなり、誰もが安心して暮らせる社会の実現に向けて日々活動している団体である。

ほたるの皆さんの作業の様子

【中条点訳グループ「ほたる」】
視覚障がい者向けに市報等を点訳し送付する活動を行っている。
活動日：毎月第一土曜の午後

取材・文／日本郵政グループ労働組合下越支部中条分会：佐藤

6

樽ケ橋遊園ゆるゆる隊

樽ケ橋遊園の魅力づくりの応援隊

胎内市に在住の方であれば、誰もが一度は訪れたことがあるであろう樽ケ橋遊園。樽ケ橋遊園は旧黒川村の時代から存在し、現在は胎内市直営である。奥胎内の山々から川を望む広大な敷地に、動物たちと触れ合えるスペースや遊園設備があり、飼育する動物は25種類、約１００匹にも及ぶ。ウサギやフェレットなど児童も気軽に触れ合える小動物から、オオフラミンゴやアルパカなど、大規模な動物園が存在しない県内では少し珍しい動物まで間近に観察することができる。

樽ケ橋遊園ゆるゆる隊は、現在32名の会員が在籍しており、樽ケ橋遊園の魅力づくりの応援隊として、平成27年に発足し、園内の花壇や藤棚、池の整備や除草作業を行っている。また、動物の飼育補助を行うなど、新発田市や新潟市から活動に参加する会員もいる。

笑顔を忘れず楽しく活動

園の奥に向かった通路には、中国原産でスギ科の「メタセコイア」が立ち並び、春は新緑、夏は深緑、秋は紅葉と季節ごとに装いを変える。また5月中旬に見ごろを迎える「藤の花」、白い花を咲かせる「ヤマボウシ」など、会員が季節ごとの花をイメージし手掛ける花壇はこれだけでも園を訪れる理由になりそうだ。

樽ケ橋遊園ゆるゆる隊は、「やれる時、やれる人が、やれる分」をボランティアモットーに、会員一人ひとりが体力と相談しながら余裕をもって参加すること、笑顔を忘れずに楽しく参加することで利用者目線で園を利用する方を喜ばせることはもちろん、会員自らも楽しみながら作業を行っていることを教えてくれた。

以前には園内にある池の「池さらい」も実施し、外来種のザリガニ駆除も行ったとのこと。きれいに整備された池では、2、30匹の鯉が泳ぎ回る。会員の中でも園芸が好きな人、得意な人は主に園芸を行い、魚や動物が好きな人は鯉や動物の管理、飼育補助を行っている。

また、他の遊園地の花壇などを参考にしながら、樽ケ橋遊園独自の演出方法を会員全員で考え活動している。

利用者の笑顔を励みに

最後に今後の団体としての展望を聞くと、「会員自ら楽しく活動し、樽ケ橋遊園を訪れる方に1日楽しく利用してもらうための活動を継続して取り組んでいきたい。広大な敷地のため、活動に賛同し新しく会員に加わって活動する仲間を増やしていきたい」と語ってくれた。

筆者が訪問した日も平日であったが子どもが笑顔で走り回る姿があった。樽ケ橋遊園を利用する方の笑顔をやりがいに、園の魅力づくりの活動を樽ケ橋遊園ゆるゆる隊は実践している。

【樽ケ橋遊園ゆるゆる隊】
新潟県でも人気の遊園地「樽ケ橋遊園」の花壇の整備、動物の飼育補助などを行い、園の魅力アップに繋げる活動を行っている。

活動日：毎月第一火曜日の午前

取材・文／日本郵政グループ労働組合下越支部中条分会：佐藤

7

異言語、異文化だけどコミュニケーションは同じ
手話サークル かえで・はまなす

昼下がりの胎内市。ほっとHOT・中条2階の「げんきななかま」で筆者は手話サークルに参加し、人生で初めての手話を体験した。初めて教えてもらった手話を使ってまずは自己紹介をしてみた。静寂に包まれた空間の中、周囲から熱い視線を感じる独特な雰囲気であった。

手話という文字から手を使ったコミュニケーションということはイメージできるが、実際は表情からの情報も読み取るため、口を使った会話よりも聞き手の視線を強く感じたのだ。聴覚障がい者は呼びかけても気づかないまたは気づきにくいため、誰に対して手話をしているか分からないことがある。そのため、目を合わせて話すことが重要である。

読者の皆さんの中でも日常生活において常に相手の目を見て話し続ける方は少ないと思うが、手話でコミュニケーションをとる際には必要なことである。また、指差し等で誰とコミュニケーションを取っているのか相手に認識してもらう必要がある。健常者からしたら一見失礼に見えるかもしれない動作が、聴覚障がい者とのコミュニケーションでは必要な動作であることに非常に衝撃を受けた。

手話で繋がるご縁

手話サークルかえでは平成6年から活動しており、取材した当日は10～15名程度のメンバーがそれぞれ使い込まれた手話の本を片手に出席していた。実践形式で手話を学ぶスタイルで活動しており、メンバーは終始楽しい雰囲気の中、手話を使って会話をしながら学んでいた。

その他にも対外的な取り組みとして、胎内市の小学校などでも手話の出前授業を行うこともあるとのこと。メンバーの方が楽しく活動していることが子どもたちにも伝わるのか、手話に興味を持ってくれる子も多いようだ。

ここに集う人々は手話を始めたきっかけは様々だが、今は手話を通してつながっている。

日本において27万6千人の聴覚障がい者が日常生活を過ごしている中、手話というマイノリティーな言語には確実に信頼関係を築く力があるのではないか。

習うより慣れよ

「覚えた手話を使うのではなく、伝えたいことを手話にして覚えたほうが楽しく学べるし、ためになる。」そう語ってくれたのは手話サークル“はまなす”代表の中村さんであった。

はじめは手話のやり方など全く分からないまま、見様見真似で自己紹介を行ったが、サークルのメンバーに一生懸命汲み取ってもらい伝えることができた時の達成感や相手が伝えたいことを理解できた時の感動は格別であった。感覚としてはジェスチャーゲームに近い印象を感じた。取材を通して、筆者は文法よりも伝えたい意思が大事であり、自分が伝えたいことは案外伝わることを実感した。読者の皆さんも手話を通じて見聞を広めてみてはいかがだろうか。

【手話サークルかえで・はまなす】
参加者同士で手話を学ぶ活動を定期的に開催。

かえで活動日：毎週木曜午後1時30分～
はまなす活動日：毎週水曜日午後7時30分～

取材・文／小野組親睦会：市村

8

コロナ禍だからこそ笑って健康
笑いヨガクラブ

取材に訪れると目に飛び込んできたのは、色とりどりのお揃いのTシャツを着て、Tシャツに負けない明るさにあふれる笑顔だった。大きな声で笑うこと、みんなで楽しむこと、ストレス解消、健康維持などを求めて十数名のメンバーが集っていた。この活動をしているのが、「笑いヨガクラブ」である。

活動を始めたきっかけは、クラブの代表である高橋さんが、市内で開催された講演会で笑いヨガの先生から話を聞き実際に体験したことで興味をもち、自分自身でも活動を実現させたいと考えたことなのだそう。高橋さんは、笑いヨガの世界的団体であるラフターヨガインターナショナルユニバーシティ認定の「笑いヨガリーダー」の称号も取得している。クラブには他に4名の笑いヨガリーダーがおり一緒に活動している。

現在は、笑いヨガに親しんでもらおうと、定期的な月2回の活動以外に、福祉施設（養護老人ホームやデイサービスなど）や市内小学校のイベント（秋祭り）に出向いて、子どもからお年寄りにも楽しんでもらう活動にも取り組んでいる。

笑いは最良の薬・健康効果

高橋さんに促され、メンバーの輪に入れてもらい、見様見真似で「ワッハッハー。ワッハッハー。」と笑いながら一時間ほど笑いヨガを体験した。最初に基本となる笑いとヨガの動きを丁寧に教えてもらい、ヨガ中盤に左右別の動きをする脳トレがあったが、リーダーの方々に目をやると難なくこなし自然に笑っていた。そのような初心者では少し難しい動きもあったりしたが、その動きの出来ない自分の動きがおかしくて笑いに笑った。

高橋さん曰く「笑いは、本当に人の心と身体に良い影響を及ぼす効果がある。」とのこと。

笑いヨガの発祥は、今から二十七年前、インドのマダン・カタリア医学博士が健康誌に「笑いは最良の薬」という記事を執筆し研究を重ね、健康効果があると実証し始めたことなのだとか。

確かに、笑って大声を出した後は身体が温かくなりスッキリと爽快な気持ちになった気がした。

みんなで笑って世界平和！

今後の展望について話を伺うと「こうやって色んな人に体験してもらって、とにかくまずは知ってもらいたい。広めたいし、広まってもらいたい。そうしてみんなで笑って笑顔で過ごせれば、たったそれだけのことで世界は平和な世の中になる。戦争もおきない。」と力強く語ってくれた。

笑いヨガは、胎内市だけの特殊な活動ではなく、日本全国・世界中で多くの人が活動しているそう。

そして、高橋さん自身、コロナ禍で笑いの大切さを痛感したのだとか。高橋さんたち胎内市笑いヨガクラブでは、これまで以上に笑いと笑顔の耐えない場が必要とされると考え、これからの活動にさらに前向きに取り組みたいと意気込んでいた。

【笑いヨガクラブ】
笑いながらヨガをする「笑いヨガ」によって、市民の健康増進を図る活動を行う。

活動日：毎月第1、3火曜日

取材・文／マルイ工業労働組合：星野、遠藤

9

胎内の自然がつないだ縁
自然を楽しもう会

6月上旬の晴れた日、集合場所に9名の方々が集まっていた。この日は笹団子づくりの活動が行われるとのこと。活動が始まるや否や全員が慣れた行動で四方八方に散り笹を採り始めた。場所は胎内市羽黒の石切山登り口付近。皆で手際よく笹採りをしながら「虫がついているのもあるから気をつけて」と声を掛け合い、「今年の笹は小さくてちょうどいい大きさがなかなか見つけられない」などとおしゃべりも楽しみながら、手早く収穫し枚数を重ねていた。この活動をしているのが「自然を楽しもう会」で、笹団子づくりは年間計画の活動の一つである。

会の活動のスタートは、代表者の浮須ひろみさんが11年前に友達4人とヨモギつみから笹採りまですべて自然のもので一から笹団子をつくったことがきっかけだった。一人では手間と時間がかかりとても大変な笹団子づくりだが、皆で手分けして楽しんでつくることが出来たことに感動と嬉しさを覚えつくり続けてきた。ある年に近所のおじいさんがつくったヨモギの色鮮やかな笹団子に出会い、俵縛りも教えてもらった。同じ頃に友達からも新しいレシピを教えてもらい、この双方を取り入れてつくってみたところ今まで以上に見た目も味も良く美味しい笹団子が出来た。

人の縁と笹団子がつないだ縁

そうやって提案してくれる人の声や会員の意見に耳を傾け試行錯誤し、良いことは取り入れて毎年笹団子づくりの活動をしている。この美味しい笹団子が口コミで広まり今では会員も20名になる。「笹団子づくり」だけではなく会員で活動を考え、今年は「味噌づくり」「キムチづくり」「クラフトづくり」など、それぞれ得意な人がリーダーとなり活動する計画をたてている。

笹団子みたいにつながっていこう。

今後の活動の思いについて話を伺うと「今は会を大きくするよりも継続していきたい。この仲間が自分に合った感じで参加し色々な良さをみつけて楽しみ、会の名前の通り『楽しもう』という気持ちで活動していきたい。」と楽しそうに浮須さんは語ってくれた。一房20個でつながれた笹団子のように会員20名もつながりをとても大事にしている。時には笹団子のスゲ紐のように絡むこともあるそうだ。「でも20名もいたらそれだけの考えがあっていいし、乗り超えて仲良しの輪が広がればもっといい。得意な人が得意なことを披露する場、楽しい主婦の会でもありたい。」と守っていきたい思いが伝わってきた。同時に「体験してみたい方は大歓迎！」と前向きに活動をしていこうという気持ちも感じられた。

代表の浮須さん（写真左）

【自然を楽しもう会】
「笹団子づくり」をはじめ、胎内市の豊かな自然を活用した料理教室などのサロン活動を定期的に開催している。

活動日：毎月第４火曜日

取材・文／マルイ工業労働組合：星野、遠藤

10

障がい者に居場所や就労の場を
特定非営利活動法人ふるさと奥山の荘

胎内市で初めてできたＮＰＯ法人は何か、皆さんご存知だろうか。それは「ふるさと奥山の荘」である。この団体は２００４年に地域おこしを目的として設立され、現在は高齢者や障がい者の支援に取り組んでいる。規模の大きな支援施設では適応できない障がい者が増える中、ＮＰＯという特性を活かして細やかなサポートを行っている。

「ＮＰＯ法人は行政と民間のすき間を埋めて、利用者の実態にあった対応をすることができる」と理事長の斎藤隆一さんは話す。現在の主な活動内容は「地域ふれあい交流事業」「日中一時支援事業」「地域活動支援センター事業」「介護予防総合事業」の４つだ。

日中一時支援事業の一環で行われている
特別支援学校への送迎の様子

特別支援学校への送迎、村上市から新潟市まで幅広く

障がいのある子どもたちの中には電車やバスなどの交通手段では登校が難しい子どももおり、保護者が車で毎日特別支援学校まで送迎しているケースも少なくない。そんな家庭への支援として、「ふるさと奥山の荘」では障がいのある子どもたちを特別支援学校へ送迎する取組を行っている。２０１２年度のサービス開始当初は村上特別支援学校への送迎が対象だったが、２０１７年度から東新潟特別支援学校への送迎も開始した。利用者の保護者からは「負担がかなり軽くなった」と感謝の声があがっている。

年間50回を超える雪かき支援

障がい者の生産的活動を支援するため、野菜の栽培や平飼いでの養鶏を行い、収穫物の販売を行っている。特に人気があるのは、枝豆と焼き芋。「とてもおいしい」と評判だ。

また、高齢者や障がい者の家庭を訪問し、掃除や雪かき、買い物等の送迎の支援も行っている。雪の多かった２０２１年は約70回の雪かき支援を地域活動支援センターの利用者が行った。

高齢者の余暇活動支援として行われる高齢者福祉施設での笹団子づくりは毎年恒例のイベント。参加者からは「かつて自分達も作っていた頃を思い出すことができ懐かしくて楽しい。作り方を知ることができて新鮮だった。」との声があがるなど、大好評のイベントだ。残念ながら近年は新型コロナウイルスの影響で開催できずにいる。イベントの再開が待ち遠しい。

高齢者福祉施設での笹団子づくりの様子

特別支援学校を卒業した子どもたちの居場所を作りたい

今後取り組みたい活動として斎藤さんは「特別支援学校を卒業して、行き場のない障がい者が残念ながらいる。そういった子どもたちの居場所を作りたい。」と語った。障がいの程度や個々の状況により支援のかたちは様々だ。行政や民間ではカバーしきれないサポートを行う「ふるさと奥山の荘」は、胎内市の高齢者や障がい者にとってかけがえのない存在となっている。

上：サポーターの皆さん（登録者２２名）
下：買い物の送迎の様子

【特定非営利活動法人ふるさと奥山の荘】
障がい者の送迎支援や、高齢者の介護予防事業などに取り組む。
TEL:0254-43-6106
MAIL:okuyama-npo@bh.wakwak.com

取材・文／新潟県労働金庫中条支店：樺澤

11

胎内市のスポーツを支えるNPO法人スポーツクラブたいない

5月中旬の太陽が見え隠れする暖かい陽気の中、整備された綺麗な芝の上で、和気あいあいと楽しそうにグラウンドゴルフを楽しんでいる方々を見かけた。この活動を支えているのがNPO法人スポーツクラブたいないだ。

スポーツと一言で言っても、様々な形態がある。競技スポーツ・青少年スポーツ・レクリエーションスポーツ・健康スポーツ等々、対象も違えば目的も違うが、このすべての受け皿となるべく活動をしているのがこの団体である。

活動内容としては、各団体への情報発信や会議の開催、市内15施設の指定管理業務など多岐にわたるが、健康づくり集団の目線で運営されている。

「子どもから高齢者まで幅広い年齢層の大勢の人にスポーツを楽しんでもらえる体制作りをしたい。」そう話してくれたのが、同法人理事長の五十嵐聖一さんだ。

五十嵐さんは長年、市役所職員としてスポーツ振興に従事されており、現役時代は国体に出場するほどの柔道家として鳴らした。定年後に理事長に就任し、現在も中学校の部活動指導員として指導に携わっている。

健康づくり集団として

「現在、行政と連携して健康促進のため週に2回の運動習慣の定着を目指している。そのためには様々なプログラムをより良い形で提供する必要がある。」五十嵐さんが話すとおり、同法人には選びきれないほどの多種多様な運動プログラムが用意されている。運動を始めたいという人の目的にいずれかはフィットするように考えられている。その教室の多くは法人スタッフが担当しており、参加者からの好評を得ているとのことだ。

また、昨年よりスポーツ協会が中心となり地域スポーツクラブという新たな事業を行っている。

これは文部科学省の方針に基づいて胎内市教育委員会が中学校の休日の部活動を「地域に移行する」という考えを実現したものである。生徒は学校や学区を超えて誰でも好きな種目に参加できる。この取り組みにより専門知識を有する指導者と部活動顧問が連携することで充実した内容を生徒に提供可能となる。今後さらなる可能性を感じる活動であり、現在は5つの団体が指導を行っている。

理事長の五十嵐さん

市民の笑顔が集まる場所に

最後に今後の団体としてのビジョンを伺うと、「健康づくりには運動を続けることが大切。参加者、指導者、競技者、全ての人がスポーツ・運動を楽しめる環境を整えれば、自然と皆さんが足を運んでくれる。その環境を整えることに〝これ〟といった正解はないがまずは良いプログラムの提供と良い施設運営を継続して行っていきたい。」と五十嵐さんは語ってくれた。

この取材中、多くのスポーツ活動をしている方々にお会いしたが、みんな笑顔でスポーツ・運動に取り組まれている姿が見受けられた。スポーツの語源はラテン語で〝楽しみ〟〝遊び〟という意味のようだ。今も昔も変わらないスポーツの姿を見たような気がした。

スポーツ・運動をしてみたいと考えている方はぜひ、NPO法人スポーツクラブたいないに相談してみてもらいたい。きっとあなたにあったスポーツの楽しみ方を見つけてくれるはずだ。

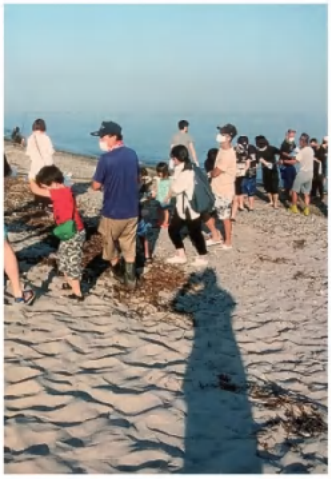
【NPO法人スポーツクラブたいない】
スポーツ教室の主催・運営のほか市社会体育施設の管理運営などの活動を行っている。
TEL:0254-43-0003
WEB:http://sportsclub-tainai.or.jp/

取材・文／胎内市職員労働組合連合会：諏訪

12

海と人を繋ぐ

特定非営利活動法人 荒川マリンクラブ



5月中旬、強い日差しを浴びながら日本海夕日ラインを桃崎浜方面へ走ると荒川マリーナの看板が見えてきた。海岸へと伸びる脇道の奥へ進むと十数隻の船が係留してあり、テトラポットでは釣りを楽しむ人の姿があった。このマリーナに佇むのが特定非営利活動法人荒川マリンクラブだ。

荒川マリンクラブは胎内市在住の海や釣りなどが好きな人たちを中心に約40人が在籍しており、係留業やマリーンの維持管理と地域住民とのふれあいイベントを開催している。

このマリーナは約30年前に国土交通省により河川利用促進事業として船舶の利便や釣りなどで遊ぶことができる場所として作られた。その後、胎内市からマリーナの維持管理の依頼を受けて、海、船や釣りが好きな人たちが集まり、友の会を立ち上げてマリーナの管理をしてきたが、地域との繋がりによる地域活性を目的として2017年に荒川マリンクラブを設立し、活動を通して地域の人たちに海の良さを伝える架け橋になれるように活動をはじめた。

イベントを通して海の楽しさを伝える

荒川マリンクラブは、毎年クリーン作戦によりマリーナ周辺の清掃を行い、きれいな海を維持している。その他にイベントとして、地元小学校からの依頼でふるさと体験学習として、魚釣り体験や、地引網体験を行ったりしている。

参加した小学生からは「魚釣りができて楽しかった。」「また船に乗りたい。」との感想が届き、海の楽しさを体験できた貴重な機会となった。

毎年11月中旬には、村上市の伝統的な食文化である塩引き鮭を作る体験会も行っている。地元の海で捕れる魚を使って新潟の食文化を知ってもらいたいという思いからこのイベントがはじまった。作り方は毎年恒例で会員の磯部さんが教えてくれる。とにかく説明が丁寧で上手なので、本業の方かと思ったら本業は村上市の市役所職員だというから驚いた。ぜひみなさんにも磯部さんの説明と新潟の食文化を堪能してもらいたい。

自然のすばらしさを知ってもらうため活動はつづく

最後に今後の展望について話を伺うと、これからも今までと変わらず活動ができることを願っていた。人口減少が進む胎内市。気候変動などによる自然環境の変化。子どもたちの遊び方もゲームなどの室内の遊びが中心となり、外で遊ぶ時間が減っている。昔は川や海で魚釣りをする子どもたちの姿が多かったが、今ではほとんど見ない。そんな時代だからこそ、荒川マリンクラブのみなさんは、海の楽しさや自然の楽しさを地元の人たちに知ってもらうために、これからも変わらずに活動を続けていきたいと代表の浮須さんは語ってくれた。

インタビューの最後に浮須さんは私たちを船に乗せてくれた。時速20キロメートルで大海原を爽快に走ると波しぶきが立ち、潮風がとても心地よく感じた。ほんの少しだったが自然を感じることができて楽しかった。船に乗った後の感想は先ほど紹介した小学生と同じように「また船に乗りたい」だ。

この記事を読んだ人たちが海に興味を持ち、荒川マリンクラブの活動に参加し、海へ行って遊ぶことが増えていくことを願いたい。

【特定非営利活動法人荒川マリンクラブ】
荒川マリーナの維持管理や、海と人を繋げるイベントや体験教室等を開催している。

取材・文／日立産機システム労働組合：清水、池田

13

地方の暮らしに新たな価値を
特定非営利活動法人ヨリシロ

爽やかな風に、晴れ渡った空と温かい日差し。外遊びが楽しい季節だと感じる5月初旬。胎内市坂井集落の山の傾斜に作られた棚田の水面に一風変わった乗り物が。海で人気のアクティビティであるスタンドアップパドルボード、通称SUPだ。棚田×SUPという異色のコラボにより、集落自慢の棚田やそこから望める景色の美しさを楽しみつつ、気軽にマリンスポーツを体験できるイベントである。

イベントを主催しているのがヨリシロだ。同法人では、棚田SUP以外にもツリーイングや昆虫採集トレッキングなどの胎内市の自然・風土を活かしたアクティビティを展開する「MURAIASOBI」というプロジェクトや、まちづくりや地域おこし、広告・PR製作の支援など、多岐にわたる活動をしている。

浮須（右）さんと共同代表の神田さん（左）

地方と人を活性化、挑戦できる空気づくりを

取組みを主導しているのが同法人の共同代表の一人である浮須崇徳さんだ。「私がかつて携わった活動で、夏休み中の大学生に一か月間胎内市の山間部に移住してもらったのですが、その時に学生と地域住民との心温まる交流を見て、いいなと思ったのがきっかけでした。」と、ヨリシロ立ち上げ当時を振り返る浮須さん。この取組みを通して「大学生との連絡手段としてLINEを始める」「大学生が作った小冊子に喜び名刺代わりに持ち歩く」等、交流が地域住民の活力に繋がっていることを肌で感じることができ、住民自身の「この農山村を残していくんだ」というエネルギーを高めていくような活動を行っていきたいという想いで、活動に取組んでいるという。

棚田SUPをはじめとした活動についても、活動を楽しむだけにとどまらず、活動の様子を地域住民の方々に見てもらうことで「自分の地域はいいところなんだ」と自信を深めてもらい、住民が主体となって次のチャレンジに取組むための端緒となることが狙いと浮須さんは語る。

チャレンジの火を灯し、継いでいく

今後の展望を伺うと、「新しいことにチャレンジしたい人、応援したい・参加したい人などが集まれる、ゆるやかなコミュニティを作りたい」と語り、そんな想いから新たなプロジェクト「TAKIBI」を立ち上げているとのこと。コミュニティの人同士で学び合い、新しいチャレンジを共に育むだけでなく、地域外の人にも胎内市が活発にチャレンジしている様子を見える化することで、さらなるチャレンジャーをまちに呼び込みたい、と語る。

取材を通して、浮須さん自身が最も大きなチャレンジの火を胸に秘めていると感じた。「TAKIBI」には20代の若者も多く集い、地域活性化のための様々なアイデアが議論されているという。ヨリシロから灯された火は、着実に継がれ育まれている。

2022年5月にキックオフした「TAKIBI」の様子

【特定非営利活動法人ヨリシロ】
人と地方の多様な関係性の創出のほか、まちづくりの中間支援などに取り組む。
WEB：https://yorishiro.org

取材・文／
UAゼンセンクラレ労働組合新潟支部：井上、山本

14

家と社会との間の居場所を
特定非営利活動法人ミンナのチカラ

中条駅から徒歩数分のところに「ミンナのＣａｓａ（カーサ）」はある。Ｃａｓａとはスペイン語で「家」を表しており、ひきこもりの人や悩みを抱える人が自然と集まり交流することで、悩みを共有したり新たなつながりができるような家を作りたいという想いから「ミンナのＣａｓａ」は生まれた。

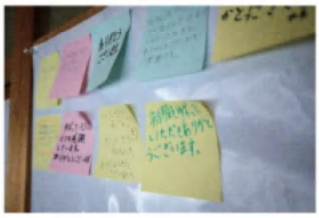
２０２０年に開設し２０２２年５月現在に至るまで、月に２回のペースで累計28回開催され、これまで多くの方が利用し、その中には就労につながった方もいる。この活動は特定非営利活動法人ミンナのチカラによって行われている。同法人は２０２０年に設立された団体で、「居場所づくり」「空き家・空き地対策」の２本柱での活動から始まり、フードバンクたいないへの参画や学用服バンク「ミンナのユズリバ」などの活動を行っている。

左から代表理事、副代表理事、ボランティアスタッフ２名

人と人がつながり、自発的に助け合う社会へ

こうした取組みの背景に「誰もがお互いを認め合い、頼り頼られる関係が自然とできるような、地域共生社会の実現を目指して活動に取組んでいます。」と語るのは、同法人の代表理事である速水隆さん。「元々胎内市役所職員として空き家対策関係を担当していたのですが、人事異動で担当を外れることになり、同じタイミングで福祉関係の担当から異動した職員がいて、お互いのこれまでの経験を活かして行政とは違う立場で地域共生を育んでいきたいという思いからミンナのチカラを立ち上げました。」と、設立のきっかけについて伺うことができた。

学用服バンク「ミンナのユズリバ」に関しても、学用服を集めて譲っているのではなく、「学用服を必要としている人」と「助けたいと思っている人」をつなげる役割を担うことを目的としており、最終的には同法人がなくなったとしても、自発的に住民同士が学用服を譲り合い、助け合っていけるような関係を築くことが理想の姿であるという。まだ活動は始まったばかりであるが、学用服は続々と集まっており、さらに譲り受けたお子さんからはお礼の言葉が多く寄せられていた。


上：譲り受けた学用服、下：お礼の一言

風情ある胎内市を守りながら、新たなモノ・コトを生み出す

最後に今後の展望について伺うと、「ミンナのチカラは生まれたばかりなので、３年・５年と、着実に一つ一つ活動を続けることで活動を定着させつつ、新しいことに挑戦しながらトライ＆エラーを繰り返すことで活動を高めていきたい。」と速水さんは話す。「まだ活動を知らない人も多く、いかに発信していくかが重要であり、今後も力を入れていく。」と、リーフレットには各種ＳＮＳに対応したＱＲコードや「ミンナのＣａｓａ」の場所を示すグーグルマップやＨＰへのリンクが添えられているなど、利用者の使いやすさが考えられた作りに仕上げられている。また、ふるさと納税の返礼品で空き家の見守り・管理ができるようにしたり、結果報告の写真をドローンで撮影したりと、今までにない新しい試みを行っている。

「ミンナのＣａｓａ」という古民家を拠点にしながらも、様々な創意工夫を取り入れ進化している特定非営利活動法人ミンナのチカラ。活動に興味のある方はぜひ訪ねてみて欲しい。

ミンナのＣａｓａでの活動の様子

【特定非営利活動法人ミンナノチカラ】
ひきこもりの方の居場所づくり、空き家・空き地対策の２本柱で地域共生社会の実現を目指す。
WEB:http://minnanochikara.org/npo/

取材・文／
ＵＡゼンセンクラレ労働組合新潟支部：井上、山本

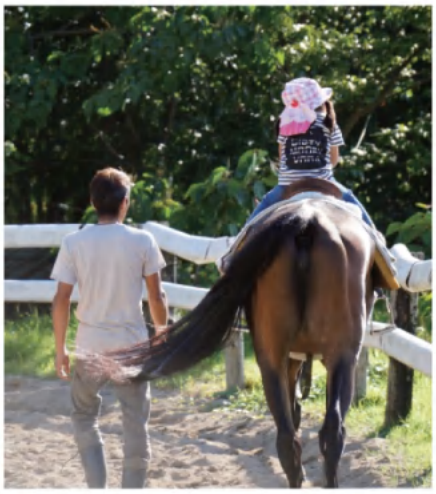
15

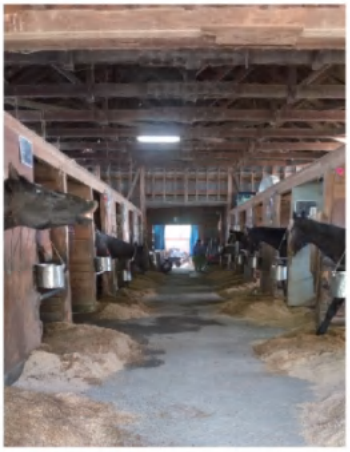
馬と人が幸せになれる場所
特定非営利活動法人 松原ステーブルス

開放感ある緑豊かな敷地と丁寧に管理された馬房、そして大切に飼育されている馬たち。松原ステーブルスは胎内市の良いところをぎゅっと集めたような牧場だ。訪れる人たちは、乗馬がしたい人、競馬に興味がある人、誰かに誘われた人と様々だ。しかし、その牧場がなぜ存在しているのかを知ったとき、再び訪れる理由は違ってくるだろう。

松原ステーブルスのはじまりは元騎手であり元調教師の松原正文さんが2005年、殺処分寸前の馬たちを引取り、静かな余生を過ごすための牧場として、たった一人で始めた「養老牧場」だ。

その想いに賛同し、現在は5名のスタッフで運営している。休日は観光客で賑わうが、普段は15頭の馬と犬や猫、そしてスタッフに穏やかな時間が流れている。





一頭でも、一人でも多くの命をつなぎたい

いじめや不登校、ひきこもり、自殺そして虐待などで苦しむ子どもの力になりたいと考えていた明星泰崇さんは、胎内市の赤谷地区に伝わる馬頭観音祭で松原正文さんと出会う。

「一頭でも多く馬の命をつなぎたい」

「一人でも多くの子どもたちの力になりたい」

二人の想いが重なり松原ステーブルスは2021年5月に「うま友留学」をスタートさせた。

うま友留学とは胎内市の空き家を宿泊施設サテライトハウスとして利用した子ども向けの体験型プログラムである。地域と関わりながら、子ども自身が留学生活を創り上げ、自立心を育む。もちろん松原ステーブルスの馬たちのお世話もする。規則正しい生活や生き物とのふれあいの中で感じることは、大きなきっかけや変化をもたらすことがあるという。

2年間不登校だった子どもがこのプログラムを通して、学校に通えるようになったときは本当に嬉しかった。日々の生活にやりがいを見出すことは子どもにも大人にも大切なことだと明星さんは語る。

共に感じ、共に育つ。

競走馬だった、繁殖馬だった、乗馬用だった、遊園地にいた、と様々な経歴を持つ馬たち。

勉強が苦手、運動が得意、遊ぶことが好き、読書が趣味、と十人十色の人間。

馬も人間もそれぞれ好きなことが違い、嫌いなことも違う。傷つく言葉も違えば、して欲しいことも違う。

それぞれがそれぞれに事情を抱えて、日々過ごしている。限られたスタッフと限られた資源、限られた施設の中で松原ステーブルスはその日常をやさしさと思いやりで包みこむ。

実際に地域の若者が松原ステーブルスに集い始め、別の活動が生まれている。

ぜひ一度松原ステーブルスに足を運び豊かな時間を体験していただきたい。

厨舎で作業をする松原さん

【特定非営利活動法人松原ステーブルス】
養老牧場「松原ステーブルス」の運営のほか、不登校の児童向け地域プログラム「うま友留学」などに取り組む。

TEL:070-8489-8787
WEB:https://matsubarastables.webnode.jp/

取材・文／小野組親睦会：中川

16

生活支援から共助社会の実現へ フードバンクたいない「キボウのヒカリ」

5月中旬の日曜日、胎内市東本町の共生型福祉拠点施設まち・らぼにおいて食品の仕分け作業が行われていた。レタスやキャベツ、お米やお菓子など様々な食材を手際よく仕分けをしているのは15名前後のシニア世代のボランティアだ。仕分けられた食料品や生活必需品は毎週日曜日に経済的な理由から支援を必要とする家庭に無償で配付される。この活動を行っているのが、2021年6月に発足したばかりのフードバンクたいない「キボウのヒカリ」だ。運営の主担当を担う一般社団法人みらいずの中村さんは、「『みらいず』での介護福祉事業、生活支援活動を通じて社会的に弱い立場の方への食の支援が必要だと感じた。」と話す。胎内市でもフードバンク利用者は毎月2・3世帯ずつ増加しており、ひとり親世帯を中心に毎回30世帯ほどに配付を行っているそうだ。

原動力は子どもの笑顔

フードバンク事業を行ううえでの原動力を代表の中村さんに伺うと、「子どもたちの笑顔」と答えが返ってきた。配布物の受け取りには親子連れが多く、子どもたちの大好きなお肉やケーキを渡したときの笑顔や「この前の○○おいしかった!」という言葉が本当に嬉しいと中村さんは言う。

ただし、課題が多いのが実情で、主食となるお米の不足や、活動の担い手不足、さらに言えば「利用者の要望に十分に応えきれていないのでは・・」という焦りなど中村さんの悩みは深い。

一例をあげると月に1回しか利用しない家庭もあるという。支援が不要であればよいのだが、遠慮や申し訳なさがあって支援を受けないという方もいる。そういう家庭にこそ支援したいと思うのだが、デリケートな問題であり踏み込めない部分もあるという。

食の支援にとどまらない活動を

最後に今後の展望について中村さんに伺った。「活動を続けながら利用者に寄り添い対話の機会を作っていきたい」、「食の支援を通じて将来を担う子どもたちを応援したい」、「賛同者を増やしフードバンクを通して共生社会の実現を目指したい」という答えが返ってきた。無論、フードバンクがない社会が理想であるが、フードバンク事業が地域の人々が助け合う〝共助社会〟の先駆けとなって欲しい。

フードバンク事業は食の支援にとどまらないからこそ、今後の可能性は無限大である。近隣市町村のフードバンク団体とのつながりもできつつある。前述の通り課題はあるが、フードバンクという生活の支援を通して人と人とのつながりを作っていくことで、人々の「キボウのヒカリ」となるだろう。

【フードバンクたいない　キボウのヒカリ】
食料品や生活必需品などの余剰品を募り、必要とする家庭に支援を行う「フードバンク事業」を行う。
TEL:0254-28-7783
http://foodbank-tainai.org/fbt/

取材／文：新潟県労働金庫中条支店：本間

SMILE by

ろうきん あんしん スマイル プロジェクト
Anshin Smile Project

本書「SMILE」は、新潟県労働金庫が主催する
「あんしんスマイルプロジェクト」の取り組みの一環
として作成された冊子です。
「あんしんスマイルプロジェクト」は、新潟県労働金庫
と会員推進機構、地域活動団体が連携し、働く人と
その家族、会員、地域社会の皆さんに一つでも多くの
《あんしん》と《スマイル》をお届けする取り組みです。

企画：新潟県労働金庫中条支店推進委員会　編集：特定非営利活動法人ヨリシロ
制作：SMILE 制作実行委員会